

Kana Kamiya

*Former lecturer at Japanology, Zagreb*

神谷 佳那 (元ザグレブ大学日本語講師)

kanakamiya2307112@gmail.com

<https://www.doi.org/10.17234/9789533791319.12>

## 漢字語彙におけるプロトタイプ理論に基づく漢字字義 拡張の分析 — 漢字「用」と「進」を例として —

### 要旨

本稿では、漢字の持つ多義性と造語能力に着目し、漢字「用」および「進」において、各字の字源から、その字義が語彙の中でどのように拡張していくかという点について、プロトタイプ理論に基づいた分析を行う。また、そこに見出せるメタファーを認知的手掛かりとし、具体物から抽象物へと発展していく過程を字義展開図として示すことで、非漢字圏中・上級日本語学習者のための漢字語彙教材開発に向けた基礎資料とすることを旨とする。認知言語学や認知心理学の知見を取り入れた学習方法によって、大量の漢字語彙学習をより効率的に進められることが期待できるだけでなく、中級以降に増加する抽象的概念を表す語彙や表現の習得を容易にし、近年あらゆる分野で重視されている抽象的思考能力の向上にも寄与する可能性がある。

キーワード

漢字語彙学習、字源、字義の拡張、プロトタイプとカテゴリー化、概念メタファー

### 1. はじめに

日本語能力のさらなる向上を目指す中級から上級レベルの日本語学習者にとって、その上達を左右する重要な要素となり、またハードルともなるのが漢字語彙学習<sup>1</sup>である。日本語教育に関わる教員や学習者

<sup>1</sup> 本稿における「漢字語彙」は、漢字が使用される単語の総体を指す。そのため、漢語(例: 食事)だけでなく、通常漢字が使用される和語(例: 食べる)も含むこととする。

の口からしばしば語られるのが日本語の「漢字の壁」であるが、特に非漢字圏日本語学習者（以下、非漢字圏学習者）にとっては、文字通り、漢字語彙学習が一つの障壁になることが多い。仮に初級段階では漢字という新しい表記法やその熟語の学習に比較的前向きに取り組むことができても、中級以降になると途端に増加する漢字語彙について、その字形・読み・意味・用法を記憶に留めていく作業に膨大な労力を費やすことになる。

本稿では、そのような非漢字圏学習者が中級以降に漢字語彙を可能な限り効率よく増やしていくための新たなアプローチとして、徳弘（2022）「六書を用いた漢字導入の語彙教育への展開」を軸とした研究会における取り組みを取り上げる。次項では非漢字圏学習者の漢字語彙学習に関して今までに明らかになっている研究結果や調査報告を概観し、その後、漢字「用」と「進」<sup>2</sup>を例として、各字源からの字義が語彙の中でどのように発展していくかという点について調査・分析する。また、プロトタイプ理論やカテゴリー化、字義拡張に見出せるメタファーなどに触れつつ、これらを認知的手掛かりとすることで、理解の促進や記憶への定着を図ることを目指した字義展開案の作成を試みる。

## 2. 先行研究

### 2-1. 語彙習得および非漢字圏学習者の漢字認知処理過程

日本語に限らず、近年あらゆる外国語教育において語彙習得が重要視されるようになり、語彙の特性や認知過程、習得方法やストラテジーなど、様々な観点からの研究結果が報告されている（今井1993、谷内2002、中村2011、Boers 2013など）。日本における外国語学習の問題点を挙げた今井（1993）では、日本人英語学習者とアメリカ人英語ネイティブスピーカーを対象とした語彙の類似性判断実験の結果、両者の語の意味表象が根本的に異なることを挙げ、従来の辞書的意味の暗記や、語を一对一対応とする信念が語の意味構造を支えるメタファーの理解を妨げ、符号化にも検索にも時間がかかってしまうことを指摘している。それを踏まえ、基本語彙は特定の文脈だけではなく、一括して主な意味用法を網羅し、その語が形成する意味カテゴリーおよび構造や、それを支えるメタファーに関する理解活動が有益であるとする（今井1993:250-10）。

この結果は日本語の漢字語彙教育にも重要な示唆を与える。この見解を応用すると、漢字一字（一語となる場合を含む）の字義から形成さ

<sup>2</sup> 研究会において担当した漢字のうち2字を対象とした。その他、「漢字字義の語彙におけるイメージスキーマ拡張の調査・分析および展開案作成の試み」（印刷中）において「方」「通」「運」の3字を取り上げている。

れる意味カテゴリー構造は、その用法として機能する各語彙によって形作られる意味クラスター同士の関係の中で、メタファーによる拡張構造を含めて理解することで、その全体像の把握や関連付けを容易にする可能性がある。日本語における漢字語彙は一字のみで語となる場合もあるが、多くが他の漢字との結びつきによって、熟語として新たな意味を形成する。その新たな語となった場合も、基本的にはその漢字の持つ字義を保持していることから、特定の字義をプロトタイプの字義<sup>3</sup>として抽出できる。その中心義からの字義拡張構造やカテゴリー形成に見出せるメタファーの理解は、漢字語彙についてより深いレベルでの認知処理を促し、記憶に結び付けやすくすることが期待できる。

また、漢字・漢字語彙の認知処理過程については、非漢字圏学習者が漢字圏日本語学習者（以下、漢字圏学習者）よりも音韻媒介ルートを積極的に用いて意味理解に至ることが報告されている（廣瀬1991、邱2002、篠塚・窪田2012など）<sup>4</sup>。例えば邱（2002）は日本語母語話者、韓国人日本語学習者、非漢字圏学習者の漢字処理過程において音韻処理が行われるか否かを解明するため、漢語の同音異義語と形態類似性を用いた実験を行った。その結果、非漢字圏学習者においては音韻媒介に依拠した処理経路のほうが優位になることを明らかにし、漢字学習が一定程度進んだ段階で、漢字熟語の形態と意味との連結を強化する必要があると述べている（邱2002：419）。非漢字圏学習者から時に「漢字があるので速く読めない」、「（たとえ見たことがある漢字でも）読み方が分からないと意味が分からない」という言葉を聞くことがあるが、漢字の形態に、一旦音韻情報（読み）を結び付けてから意味理解へ至る経路が優勢となるためであり、その結果、意味処理に時間を要するのである。

## 2-2. 非漢字圏学習者の漢字・漢字語彙学習

岡崎（1993）は主に非漢字圏学習者に対する漢字指導のあり方について包括的にまとめた論文の中で、初級・中級・上級の各段階において留意すべき点について記している。特に中級以降は多様な語彙の習得が重要となる点を挙げ、日本語における頻度の高い語彙だけでなく、抽象的

<sup>3</sup> プロトタイプ論については5.1.3でも述べるが、例えば有光（2008）は「プロトタイプ論では、多義語の中でも基本的な意味をまず定め（プロトタイプの意味）、その上でそれぞれの多義語を意味転用の結果として生まれた多義関係と捉える（有光2008：88）」としている。本稿では漢字の持つ多義性に着目し、この点を日本語の漢字語彙教育に応用しようとするものである。

<sup>4</sup> ただし、漢字圏学習者や日本語母語話者が完全に直接ルート（形態→意味）による処理を行うわけではなく、基本的には形態と音韻の競合による並列処理を行うという見方が広く受け入れられている（邱2002：413）。

概念を表す漢語の知識を豊かにすることで、日本語の全体的底上げを図る必要性を説いている(岡崎1993: 21)。また、加納(2000)も日本語学習が中級、上級へと進むにつれて増えていく読解や作文練習から、学習の中心は書き言葉へと移っていき、漢字語彙の数が加速的に増えていくことが学習者の負担となることを指摘する(加納2000: 36)。非漢字圏学習者にとっては「漢字に慣れ親しみ、漢字とその仕組みを学ぶ」という初級段階から、中級以降には「漢字学習は語彙学習である」という意識への転換や、膨大な数の語彙を前に学習意欲が低下してしまわないよう、指導方法や学習方法の見直しが求められるのである。

また、漢字学習における困難さの起因となる点については、一般に；①数の多さ、②読みの多さ(音読み・訓読み等)、③同音異義語や異字同訓、④多義性、⑤字形の複雑性などが挙げられる<sup>5</sup>(岡崎1993, 濱川2017)。これらに加え、特定の教科書を使用して漢字を学ぶ際に負担となり得るものとして、「(各漢字について導入される)語彙の意味に関連性を見出すことが難しい(徳弘2022: 85)」という点も挙げられる。例えば、今回取り上げる「用」という漢字は日本語能力試験(JLPT)のN4レベルの初級漢字であるが、初級段階で学ぶ語；「用事(a thing to take care of)」「用意する(to prepare)」「子供用(for children)」<sup>6</sup>などに加え、中級以降に取り上げられるであろう語彙として；「用件(business, requirements)」「採用(recruitment)」「用語(terms)」「器用(skillful, dexterity)」「作用(effect)」などが挙げられる。すべて「用」を含む語彙であるものの、それぞれの意味としての英訳には関連性を見出しにくく、これらを記憶するためには、おそらく多くの場合、一語ずつ独立した語として、対訳とともに覚えていく方法が取られるのであろう。

さらに徳弘・川村(2006)は「漢字の造語能力に関する基礎調査」として、単漢字2,100字およびそれらの漢字を含む単語約15,000語を対象とした調査を行っている。その結果、使用頻度と親密度が高く、かつその漢字を含む単語数の多い漢字が、主に初級で学ぶ漢字であったことを報告し、中級以降に語彙量を増やすためには、新しい漢字だけでなく、既習漢字(初級段階で学んだ漢字)の造語能力に着目した教育が必要であることを指摘している(徳弘・川村2006: 17)。

<sup>5</sup> 岡崎(1993)はこれらのほか、「音標文字に慣れ親しんでいることによる、漢字そのものに対する違和感(岡崎1993: 11)」を挙げている。

<sup>6</sup> ここでは日本語総合教科書『初級日本語 げんきⅡ [第三版]』より例として挙げている。

### 3. 研究の目的

本稿では、先行研究を考慮しつつ、日本語教育における非漢字圏学習者（中級～上級）のための漢字語彙指導および学習に貢献することを目的とし、漢字語彙学習用教材開発に向けた基礎資料の作成を目指す。執筆者が所属する研究会「字源から語彙を拓げる学習方法研究会」<sup>7</sup>において担当した漢字から「用」と「進」を取り上げ、六書を用いた字源の調査および語彙における字義展開の分析を行う。また、分析にはプロトタイプ論やカテゴリー化、メタファー理論を取り入れ、それらを認知的手掛かりとすることで中上級漢字語彙の拡大に繋げることをねらいとした字義展開案の作成を試みる。

### 4. 研究の手順

執筆者が所属する研究会における研究手順は下記(1)～(5)の通りであるが、本稿では(1)～(4)までの手順で作成した字義展開案について分析を行う。

(1) 各単漢字の字源を、12種類の字典（表1）を使用して調査する。字源が諸説あるものは日本語教育での指導・学習における有効性などの観点から選定する<sup>8</sup>。

<sup>7</sup> 徳弘（2022）「六書を用いた漢字導入の語彙教育への展開」を基盤とした研究を行う。研究会のメンバーは徳弘康代、Noriko K. Williams、山田京子、小山真理、小山由記、神谷佳那（執筆者）の6名である。

<sup>8</sup> どの説を採用し、どのように指導や学習に応用させることが日本語教育における漢字語彙学習に有効であるかという観点から、研究会メンバーと議論した上で決定する。

表1 使用字典一覧

番号	字典／辞典名	著者／編者等	使用版年	出版社
①	『大漢和辞典』	諸橋轍次	1986	大修館書店
②	『大漢語林』	鎌田正・米田寅太郎	1992	大修館書店
③	『新字源』	小川環樹・西田太郎・赤塚忠	2009	角川書店
④	『大字源』	尾崎雄二郎・都留春雄・西岡弘・山田勝美・山田俊雄	1992	角川書店
⑤	『角川小辞典3 漢字の語源』	山田勝美	1985	角川書店
⑥	『全訳 漢辞海』 第四版アプリ版	監修：戸川芳郎 編者：佐藤進・濱口富士雄	2017	三省堂
⑦	『学研新漢和大字典』	藤堂明保・加納喜光	2005	学習研究社
⑧	『例解学習漢字辞典』	編：藤堂明保	1987	小学館
⑨	『漢字語源語義辞典』	加納喜光	2014	東京堂出版
⑩	『字通』	白川静	1997	平凡社
⑪	『新潮日本語漢字辞典』	新潮社編	2008	新潮社
⑫	『新大辞典 [普及版]』	編著者：上田万年・岡田正之・飯島忠夫・柴田猛猪・ 飯田伝一	1993	講談社

(2) 各漢字を含む語彙を収集するためのデータベースとして、徳弘(2008)『よく使う順漢字2100』における漢字語彙36,000語のデータを使用する。字義展開案に使用する漢字語彙は学習指標値<sup>9</sup>や旧日本語能力試験級<sup>10</sup>などを考慮して選定するが、日本語教育において有用な語彙であると判断したものを任意で追加することもある。

(3) 単漢字の字源を基に語彙における字義拡張を分析し、特に具体物から抽象物への字義拡張に着目しながら、字義展開案を作成する<sup>11</sup>。

(4) 語彙に適宜イラストを付ける(担当: 小山真理)。

(5) 展開案に沿った短い解説をつけ、英訳を入れた単語リストを作成する。

作業にあたっては、データベース管理ソフト「File Maker」を使用する。File Maker は上記(2)に記した漢字語彙36,000語のデータベースと紐づけられており、特定の漢字を含む語彙の一覧、使用頻度値、親密度値、学習指標値、旧日本語能力試験級、品詞、分類項目、漢字検定級などの詳細情報が一度に閲覧できるようになっている。また、漢字ごとに一通りの資料—字源データ、字義展開案、単語リスト、古代文字やイラスト<sup>12</sup>といった画像データなどをまとめて保存し、適宜検索、閲覧、ダウンロードが可能である。

## 5. 分析と考察

漢字「用」と「進」を対象とし、各字の字源の調査および語彙の選定と、語彙における字源からの字義拡張の分析を行う。また、プロトタイプの字義とカテゴリー、字義展開に見出せるメタファーについても触れながら、字義展開案の考察を試みる。

<sup>9</sup> 徳弘(2008)のデータベースにおける指標の一つであり、特定の漢字を含む語彙を使用頻度および親密度によって順位付けしたものである。最小値0から最大値10で示され、10が最もよく使用され、なじみのある語彙となる。

<sup>10</sup> 徳弘(2008)のデータベースにおける指標の一つであり、旧日本語能力試験の級数を表す(新試験における語彙出題基準は公開されていない)。1~4の値はそれぞれ1級~4級に対応し、出題基準に記載がない語には0の値が付けられている。

<sup>11</sup> 字義展開案作成後、研究会にて議論を重ね、適宜修正を加えていく。

<sup>12</sup> 本稿における古代文字は Noriko K. Willams, イラストは小山真理(両名とも上記研究会メンバー)より提供を受けた。

## 5.1. 「用」の分析

## 5.1.1 「用」の字源

「用」の字源には諸説あるが、主に次の5つに大別される。(1) 甬鐘(ヨウショウ)という鐘の形を象り、柄で持ち上げることから、とりあげる・用いる意を表す(字典①・②)、(2)材木を組んで作った柵の形を表す象形文字(③・④・⑤・⑩・⑪<sup>13</sup>)、(3)「ト(うらない)」と「中(あたる)」の合字であり、事を行う際にト筮(ぼくぜい)したことから、実施する・使いもちいる意味を表す(⑥・⑫)、(4)「長方形の板+棒」で、板に棒で穴をあけ通すことで突き通す様子を意味し、のちに力や道具の働きを通し使う意となる(⑦・⑧)、(5)筒形のものに上から下に縦棒を突き通す様子を象徴的に描いた図形(⑨)というものである。

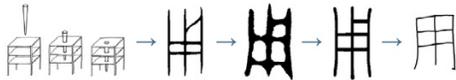


図1 「用」の字源

尚、文末にある括弧内の番号は表1における字典番号と一致する。これらの説から(4)「長方形の板+棒」という<sup>14</sup>を採用し(図1)、字義展開案を作成した。

## 5.1.2 「用」の字義展開

上記5.1.1の字源に基づいた、「用」を含む語彙の字義展開案を示す(図2)。図に示す通り、「用」は長方形の板と棒という具体物を表し、複数の板に棒で穴をあけて縦に突き通す様子から、「手を加えて加工して使う」意味となり、「用いる・使用」という語となる。そこから使用目的を持った特定のものを指す語となり、使う対象が物の場合は「用具・日用品・用語」などの語に、お金の場合は「費用」となる。また、その物の使いみちや目的を表し「用途・用法・～用(子供用・大人用・学生用)・食用」などの語に派生する。

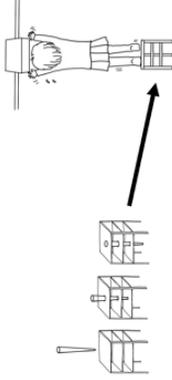
人は時として、ものを役立てて使う、あるいは悪く使うなど、様々な使い方をする。「利用・専用・乱用・悪用」などである。そのうち、「～して使う」という用法を持つものに「引用(引いて使う)・愛用(愛して使う)・信用(信じて使う)」などの語がある。また、特定のものをうまく働かせて使う場合、お金については「運用」、人の場合は「雇

<sup>13</sup> ただし、字典⑩・⑪は「中に犠牲をおいた柵を表す象形文字」とする。「用ふ」が犠牲とする意味を表すことから、働きや備えなどの意味で使われるようになったとしている。

<sup>14</sup> 4(1)における基準に加え、「用」が使われる漢字「通」の字源も考慮して決定した。

◆ 「用」：〔会意〕

「長方形の板 + ト(棒)」から、板に棒で穴をあけて通す・突き通す  
 → 手を加えて加工して使う



→ **使う** 「用いる」「使用」



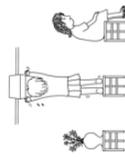
→ **使うもの** 「用具」「日用品」「用品」「用紙」「用語」「用地」・ **使うお金** 「費用」



→ **使いみち・目的** 「用途」「用法」「～用：子供用・大人用・学生用…」  
 「食用」「薬用」「実用」「私用」「公用」「無用」



→ **様々に使う** 「利用」「専用」「乱用」「悪用」「多用」



→ **～として使う** 「活用」「応用」「適用」「引用」「代用」「兼用」「愛用」「信用」  
 → **～を(うまくだかして)使う** → お金やもの「運用」・人「雇用」「採用」「起用」



心「用心」「用意」・技「器用」

→ **広く使われる** 「通用」「慣用」

→ **手を加える**



→ **仕事・すること** 「用」「用事」「用件」「用件」

→ **はたらき** 「作用」「副作用」



図2 「用」の字義展開図

用・採用・起用」，心は「用心・用意」，技を使うこととして「器用」などの語にもなる。

さらに、「通用・慣用」など、ものが広く使われることを表す語にも展開していく。例えば「通用」については、「通」の字に含まれる「甬(ヨウ)」が「滞りなくつらぬく・突きとおす様子」という字義を持ち、そこから拡張した「全体へ行き渡る」という意味を表すことから、「通用=全体へ行き渡るように使われる」<sup>15</sup>と理解することができる。

加えて、「用」はその字源における「手を加える」という字義から、人の仕事・することを表す語へと字義の拡張が起こる。「用・用事・用件」などである。さらに仕事という字義から発展し、対象物そのもののはたらきを指す語としての「作用・効用・副作用」などの語に繋がっていく。

### 5.1.3 「用」のプロトタイプと意味カテゴリー構造

「用」の字義展開全体の意味構造について、そのプロトタイプの字義と、用法としての語彙における意味カテゴリー構造を図示した(図3)。1970年代にE.H. ロッシュらによって提唱されたプロトタイプ理論は従来の古典理論を批判し、カテゴリーの成員が、その典型的な成員(プロ

#### 「用」のプロトタイプと意味構造



図3 「用」の意味カテゴリー構造

<sup>15</sup> 「甬」には「用」の字が含まれており、人が足で地板に棒を踏みとおす様子を表して、一方向に突き抜ける・突き通る意となる(字典：⑦・⑧)。一方向という方向性が、字義拡張により両方向へ、そして全体へと行きわたる様子を意味する語となる。

トタイプ) から属性においてどの程度類似しているか(あるいは家族性的類似性を有しているか否か)によってカテゴリー化するものである(Lakoff 1987, 加藤ほか2009, 須藤・茂木2004, 中井2013など)。今井(1993)は Lakoff による放射状カテゴリーを使った意味表象モデルを例として、「語の具体的な用例から幾つかの意味クラスターが形成される。それらの意味クラスターは一見相互関連性なくバラバラに存在しているようだが、実はメタファーによって繋がれた、ひとつの構造化されたカテゴリーを形成している(今井1993:2)」と述べている。本来は語とその用例の分析について用いられるプロトタイプ論であるが、多義性や造語性という性質を持つ漢字にこの理論を応用すると、漢字一字(あるいは一語)の字義からメタファーによって派生した用例(漢字語彙)の意味カテゴリー構造を示すことができると考える。

ここでは意味カテゴリー構造を楕円と色の濃淡によって示し、最も色の濃いものをプロトタイプの字義として、薄くなるごとにその中心義(典型例)からの拡張を表すこととする<sup>16</sup>。カテゴリー内には便宜上名前を付け、そのカテゴリーに含まれる語彙の例を示している。例えば「用」の字源「手を加えて加工して使う」(図3左上楕円)は「用」のプロトタイプの字義にあたり、その字義は主に「使う」ことや「手を加える」ことを表す語彙の意味カテゴリーを形成する。「使う」という字義から派生した形で、使われるもの、使いみち、使い方、使われ方における語彙がそれぞれ「用」の用法としての意味的類似性を持つ集合体である。また、「手を加える」という字義は、同時に「仕事・すること」を表す語彙の意味カテゴリーを形作る。「手を加える」という表現自体も概念メタファーという基盤により成り立つ表現であるが、手を動かして物を加工・修正・補修する意味であり、ここには「手を動かす≒仕事をする」という、行為の類似性から生まれたメタファーを見出すことができる。さらに、その「仕事」という字義から、「動く・はたらくこと」、そして力を加える対象物そのものの「はたらき」を表す語の意味カテゴリーへと拡張する。

「用」の字義展開図(図2)に使用した語彙46語を表に示す(表2)。

<sup>16</sup> 紙面の都合上、同色で中心からの距離が異なる楕円があるが、基本的に同一の色については同距離と考える。

表2 「用」の語彙一覧

番号	ことば	よみ	品詞	類義語	類義語数	学習 後継語	JLPT (旧級別)	番号	ことば	よみ	品詞	類義語	類義語数	学習 後継語	JLPT (旧級別)
1	用いる	もちいる	他		5	4	9	2	20	活用	名		5	4	9
2	使用	しよう	名		5	5	10	2	25	必用	名		5	5	10
3	用具	ようぐ	名		4	3	7	0	26	適用	名		5	4	9
4	日用品	にちようひん	名		3	4	7	2	27	引用	名		4	3	7
5	用品	ようひん	名		4	3	7	1	28	代用	名		2	3	5
6	用紙	ようし	名		5	4	9	2	29	兼用	名		2	3	5
7	用語	ようご	名		4	4	8	2	30	変用	名		3	4	7
8	用地	ようち	名		5	2	7	0	31	借用	名		5	5	10
9	費用	ひよう	名		5	5	10	2	32	運用	名		5	2	7
10	用途	ようど	名		4	4	8	2	33	雇用	名		5	4	9
11	用法	ようほう	名		2	3	5	1	34	採用	名		5	5	10
12	一用	~よう	名・接尾		5	4	9	3	35	起用	名		5	2	7
13	費用	しょうよう	名		3	4	7	0	36	用心	名		2	5	7
14	乗用	やくよう	名		0	4	4	0	37	用意	名		5	5	10
15	実用	じつよう	名		3	5	8	2	38	器用	形動・名		1	5	6
16	私用	しいう	名		1	4	5	1	39	通称	名		4	3	7
17	公用	こうよう	名		2	2	4	1	40	慣用	名		0	1	1
18	無用	むよう	形動・名		3	4	7	1	41	用	名		5	4	9
19	利用	りよう	名		5	5	10	3	42	用事	名		2	5	7
20	専用	せんよう	名		5	4	9	1	43	用件	名		1	5	6
21	乱用	らんよう	名		4	3	7	1	44	作用	名		4	4	8
22	悪用	あくよう	名		3	3	6	0	45	効用	名		4	3	7
23	多用	たよう	名		3	2	5	0	46	副作用	名		4	5	9

## 5.2. 「進」の分析

### 5.2.1 「進」の字源

次に、漢字「進」の字源と字義の展開についても考察する。「進」の之繞(しんにょう・しんにゅう)は「道を進んで行く」意味を持つが、「隹(スイ)」の部分に諸説ある。(1)「隹」はとり<sup>17</sup>の象形であり、鳥が飛んで行く意味から、すすむ意(字典：②・⑦・⑧・⑨)，(2)「隹」は音符「スイ」→「シン」(すすむ意・晋：シン)を表し、すすみ出る、先に出る意(③)，(3)「隹」は音符「スイ」→「シン」(くつを履いて外に出る意・出：スイ)を表し、くつを履いて道路に歩み出ることから、すすむ意(④・⑤)，(4)「隹」は「門+隹」の省略形が音となり、登りすすむ意(⑥・⑫)，(5)もと進退に関して、鳥占(とりうらない)によってことを決する意(⑩・⑪)とある<sup>18</sup>。今回は(2)の音符(すすむ意)も参考にしつ

つ、基本的には「隹」を鳥の象形とする(1)の説を採用し(図4)，字義展開案を作成した。



図4 「進」の字源

### 5.2.2 「進」の字義展開

「進」は進む・行くことを表す「辵(辵)」に、鳥の形でありシン(すすむ意)の音を持つ「隹」を合わせ、鳥が前方に飛んで行く様子を表す。その様子から、前に出る・前方に出すこととして「進む・前進・進行」などの語となる。前に出始める・出発することから「発進」、戦いにおいて前進することから「進撃・進攻・進軍」などの語へと発展する。また、進むことに後続して起こる動作を表す「進出・進入」、進み方・程度・様子を表す語として「進度・増進・突進」などがある。まっすぐ進む意味の「直進」から、すすむ道を表す「進路」にも繋がっていく。

「進」はまた、前に進むことから、発展することへと字義の拡張が起こる。物事が良いほうに向かう様子を表す語として「進歩・促進・進化・躍進」など、発展している国としての「先進国」もある。さらに、発展するというイメージから、上にあがることや次のステップへ向かって行くことを指す語となる。「進学・進級・昇進」などである。加えて、目上の人へ差し出すものを表し「進言・進呈」などの語にもなる。

<sup>17</sup> 「隹」(ふるとり)の指すとりは、「鳥」と区別されるため、ひらがなで記載されている。

<sup>18</sup> 字典①は解字欄が無いので記載していない。

◆ 「進」：[会意兼形声]

「辵(疋)+佳(とり)」。

→ 鳥が飛んで行く様子から、すすむ意味を表す。



→ 前に出る・前方に出す



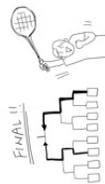
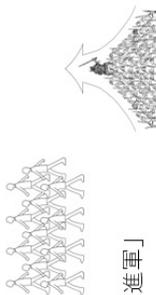
「進む」「進める」「前進」「進行」「行進」

→ 前に出始める・出発する「発進」→ 戦いにおいて前に出る「進撃」「進攻」「進軍」「進軍」

→ 前に進んで～する「進出」「進入」

→ 進み方・程度・様子「進度」「急進」「増進」「突進」

→ まっすぐ進む「直進」→ すずむ道「進路」



→ 発展する



→ 良いほうに向かう「進歩」「促進」「進化」「進展」「躍進」「推進」→ 発展している国「先進国」

→ 上・次のステップにあがる「進学」「進級」「昇進」「累進」

→ 目上の人へ差し出す「進言」「進呈」 c.f. 方向づけのメタファー (orientational metaphors)

→ さらなる展開

・前に出るか後ろに下がるか → 身の処置 → 「進退」

・進み努める → 「精進」

・複合語として → 「押し進める」「突き進む」

・四字熟語として → 「日進月歩」「一進一退」



図5 「進」の字義展開図

「進」は本来、前方に出ていく様子、つまり空間位置的方向における移動が基本となるが、ここではそれが概念メタファー<sup>19</sup>により時間的方向における移動へと転用されていることがわかる。「進歩・進化」などは、空間位置的な移動ではなく、物事が時間軸上の未来へと運ばれていき、それに伴い良い方向に向かう・向上することを表すのである。

これは Lakoff and Johnson (1980) の言うところの「方向付けのメタファー (orientational metaphors)」と関連する。方向付けのメタファーは「上一下、内一外、前―後、中心―周辺」など空間的方向性を基盤としたものであり、例えば上下のメタファーについては、「景気は上向きだ」、「支持率が下降する」などの表現が「良いことは上、悪いことは下 (GOOD IS UP, BAD IS DOWN)」(Lakoff and Johnson 1980 : 24) というメタファーにより成り立っていると考える。通常、この上下のメタファーは垂直性を軸とするものであるが、山添 (2015) は「上り電車/下り電車」などの例を挙げ、垂直方向性を空間的(前後の)方向性に転用した、特別な形のメタファーが見られることを指摘している。これは水平概念を垂直概念で、前後を上下で理解するものであり、瀬戸 (1995) が説明するところの「投射認識・投射表現」であるとする(山添2015 : 77-79)。瀬戸 (2017) においても、「『向上心』と『前向きな姿勢』が似た意味合いを持つのは、投射認識によって、上と前が結びつくからだ(瀬戸2017 : 96)」と説明されている。このことから、「進」におけるここでの字義拡張も、前方に向かって進むという空間方向的移動から時間方向的移動へ、さらにそれが「上」と結びつく投射認識により「次の段階へ上がる」「目上の人へ」という字義拡張を生み出したのではないかと考えられる。これは、Lakoff and Johnson (1980) の „The future will be better. <未来はより良い>” という („FUTURE IS UP<未来は上>” や „GOOD IS UP<良いことは上>” と一貫する (Lakoff and Johnson 1980 : 32) ) メタファーにも通じていると言える。

「進」は他にも、「進退」のように前に出るか後ろに下がるかという身の処置を表す語や、「精進」のような集中して進み努めることを表す語にも発展する。複合語として「押し進める・突き進む」などがあるほか、四字熟語としても「日進月歩・一進一退」のように使われる。

<sup>19</sup> 瀬田 (2009) はメタファーについて「ある概念領域における概念またはイメージと結びつく推論形式を、別の概念領域に転用する認知能力(瀬田2009 : 53)」と定義している。

## 5.2.3 「進」のプロトタイプと意味カテゴリー構造

「進」においても、そのプロトタイプの字義からの、拡張を基にした漢字語彙の意味カテゴリー構造について考察する(図6)。「進」は、文字通り「進む」がプロトタイプの字義となり、「前方に出る」意味のカテゴリーを形成する。そこから派生し、「出発する」「まっすぐ行く」「(進みの)程度や様子」「進んで~する」という意味を持つ語群を形作る。さらに、進む・前進することが行為の一部となる「戦い」や、まっすぐ行くことから、歩く「経路」に焦点があたり、「みち」を表す語へと拡張する。この「みち」のカテゴリーにおける「進路」は、「船の進路」のように進んで行く軌道も指すが、「卒業後の進路を決める」のように、比喩的な時間軸上の方向を指す語にもなる。5.2.2でみた空間的方向から時間的方向への転用による字義拡張である。図中の「発展する」も、「進む」という字義からのメタファーを基盤とした字義拡張によるカテゴリーであり、これを軸としてさらにいくつかのカテゴリーを形成する。「よい方向に向かう」、「次のステップへ向かう」ことを表す語群となり、さらに投射認識により「上に向かう」イメージを共有して「目上の人へ差し出すもの」という意味を持つ語のカテゴリーとなる。

漢字語彙教育に関しては漢字の字形的な特徴だけでなく、語としての機能や意味的に関連するネットワークに着目して指導することの重要性なども指摘されている(加納2000)が、このような字義展開案で特定の漢字における字義拡張構造を示すことで、一つ一つの漢字語彙の場当たりの暗記方法からの脱却や、上級までに学んでおくの良いであろう語



図6 「進」の意味カテゴリー構造

表3 「進」の語彙一覧

番号	ことば	よみ	品詞	頻度値	親密度値	学習 指標値	JLPT (旧級数)
1	進む	すすむ	自	5	5	10	3
2	進める	すすめる	他	5	5	10	2
3	前進	ぜんしん	名	5	5	10	2
4	進行	しんこう	名	5	4	9	1
5	行進	こうしん	名	4	4	8	1
6	進進	はっしん	名	3	4	7	0
7	進撃	しんげき	名	3	0	3	0
8	進攻	しんこう	名	3	0	3	0
9	進軍	しんぐん	名	1	0	1	0
10	進出	しんしゅつ	名	5	4	9	1
11	進入	しんにゅう	名	3	3	6	0
12	進度	しんど	名	0	1	1	1
13	急進	きゅうしん	名	3	0	3	0
14	増進	ぞうしん	名	3	1	4	1
15	突進	とっしん	名	2	4	6	0
16	直進	ちよくしん	名	2	5	7	0
17	進路	しんろ	名	4	4	8	1
18	進歩	しんぽ	名	5	5	10	2
19	促進	そくしん	名	5	3	8	1
20	進化	しんか	名	4	4	8	1
21	進展	しんてん	名	5	3	8	1
22	躍進	やくしん	名	4	1	5	0
23	推進	すいしん	名	5	2	7	1
24	先進国	せんしんこく	名	5	4	9	0
25	進学	しんがく	名	5	5	10	2
26	進級	しんきゅう	名	2	4	6	0
27	昇進	しょうしん	名	4	4	8	1
28	累進	るいしん	名	2	0	2	0
29	進言	しんげん	名	3	0	3	0
30	進呈	しんてい	名	0	2	2	1
31	進退	しんたい	名	4	2	6	0
32	精進	しょうじん	名	2	2	4	0
33	押し進める	おしすすめる	他	0	1	1	0
34	突き進む	つきすすむ	自	3	2	5	0
35	日進月歩	にっしんげつぽ	名	1	1	2	0
36	一進一退	いっしんいったい	名	3	1	4	0

を関連させ、整理しながら指導・学習を進められる可能性がある。

「進」の字義展開図（図5）において使用したのは表3の36語である。

## 6. 研究意義

漢字学習は語彙学習であると言われ、近年、その理解や記憶を助けるための教材やアプリなどは枚挙にいとまがないが、非漢字圏学習者に対しては、その認知過程における傾向を考慮した上で、漢字の持つ特性を最大限に生かした学習方法を提案することが肝要であると考えられる。

字源からの字義拡張に着目した学習により、語構造が全く異なる言語を第一言語（L1）とする学習者にとっても、日本語の漢字から作られる語彙の意味カテゴリーやその範囲を概観することができ、学びの効率化が期待できる。加えて、プロトタイプの字義からの語彙カテゴリーやメタファーの理解は語彙同士をある程度関連付けて記憶することを可能にする。語の中に見出せるメタファーや、具体物から抽象物への字義拡張を辿っていく過程は、時にイラストなどでは表しづらい抽象的概念を表す語の理解だけでなく、抽象的思考能力向上への一助となる可能性がある。

## 7. まとめと今後に向けて

本稿では、漢字「用」と「進」を取り上げ、その字源からの字義拡張について、認知心理学・認知言語学の視点を取り入れた分析を試みた。

「用」は複数の板に棒を通す、「進」は鳥が飛んで行く様子を表すという具体物が字源となり、それぞれが字源からの字義を語彙の中で拡張させる形で発展していく。また、その拡張の基盤となるのがメタファーであり、各語彙はその漢字のプロトタイプの字義を保持しつつ、その属性において関連する語の意味カテゴリーを形成する。この包括的な語構造は、漢字の多義性と造語能力に支えられており、本論ではこの構造を字義展開図によって可視化することを試みた。

非漢字圏学習者にとって漢字語彙の習得は確かに時間を要するものであるが、一旦習得をしさえすれば、日本語の読みにおける意味理解処理と読解速度が格段に速くなる。この文字の持つ利便性と魅力を伝え、漢字を得意とする学習者にとっても、困難さを抱える学習者にとっても意義のある漢字語彙学習の提案となるよう、今後もさらなる研究と模索を続けていきたい。

本稿では音読み・訓読み、自・他動詞、和語・漢語の別や、語彙習得の領域において重視されるコロケーションや用法については触れなか

ったが、今後はそれらの点も考慮に入れた考察を試みる。また、字義展開案を基にした学習用資料開発に向けてさらに多くの漢字を分析対象とし、実際の教育現場において抽象的思考法を取り入れた漢字教育を行うことで、その有効性の実証を目指したい。

## 参考文献

- 1) 有光奈美 (2008) 「英語における前後の空間認知と行為の実現性」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』8, 87-101.
- 2) 今井むつみ (1993) 「外国語学習者の語彙学習における問題点一言葉の意味表象の見地から」『教育心理学研究』41-3, 243-253.
- 3) 岡崎正道 (1993) 「日本語教育における漢字指導のあり方」『Artes liberales』52, 11-28.
- 4) 加藤雅人ほか (2009) 「意味論的カテゴリーのプロトタイプ構造と家族的類似性」『情報研究：関西大学総合情報学部紀要』31, 1-37
- 5) 加納千恵子 (2000) 「中上級学習者に対する漢字語彙教育の方法」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』15, 35-46
- 6) 邱學瑾 (2002) 「漢字圏・非漢字圏日本語学習者における漢字熟語の処理過程—意味判断課題を用いた形態・音韻処理の検討—」『教育心理学研究』50-4, 412-420.
- 7) 楠見孝 (2002) 「類似性と近接性—人間の認知の特徴について—」『人工知能学会誌』17-1, 2-7.
- 8) 篠塚勝正・窪田三喜夫 (2012) 「日本語文字形態（漢字，ひらがな，カタカナ）による認知言語処理の差異」『成城文藝』221, 98-84.
- 9) 須藤珠水・茂木健一郎 (2004) 「言語獲得気における語意学習とカテゴリー認知のメカニズム」『電子情報通信学会技術研究報告書』104, 17-22.
- 10) 瀬田幸人 (2009) 「メタファーについて」『岡山大学大学院教育学研究集録』142, 49-59.
- 11) 瀬戸賢一 (2017) 『よくわかるメタファー 表現技法のしくみ』筑摩書房
- 12) 谷内美智子 (2002) 「第二言語としての語彙習得研究の外観—学習形態・方略の観点から—」『言語文化と日本語教育』増刊特集号第2章, 155-169.
- 13) 徳弘康代 (2005) 「中上級学習者のための漢字および漢字語彙学習資料の開発」『講座日本語教育』41, 41-63.
- 14) 徳弘康代・川村よし子 (2006) 「漢字の造語能力に関する基礎調査」『日本語教育方法研究会誌』13-2, 16-17.
- 15) 徳弘康代 (2007) 「漢字会意・形声文字導入におけるメタファー研究の応用」『日本語教育方法研究会誌』14-1, 72-73.

- 16) 徳弘康代 (2008) 『日本語学習のためのよく使う順漢字2100 付録 CD-ROM : 漢字語彙3万6千語一学習指標値付き』三省堂
- 17) 徳弘康代 (2022) 「六書を用いた漢字導入の語彙教育への展開」『JSL 漢字学習研究会誌』14, 84-93.
- 18) 中井孝章 (2013) 『イメージスキーマ・アーキテクチャー—初期発達の認知意味論』三学出版
- 19) 中村嘉宏 (2011) 「語彙習得の諸相」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』15-2, 34-54.
- 20) 濱川祐紀代 (2017) 「わたしたちの思う『漢字の語彙の難しさ』—難しさ軽減にむけて—」『JSL漢字学習研究会誌』9, 122-127.
- 21) 坂野永理ほか (2020) 『初級日本語げんきII [第三版]』ジャパントイズ出版
- 22) 平山三男 (2022) 『漢字の語源図鑑』かんき出版
- 23) 廣瀬等 (1991) 「漢字の認知に対する心理学的研究の展望」『広島大学教育学部紀要』40, 57-65
- 24) 最上英明 (1994) 「メタファーと認知」『香川大学一般教育研究』46, 71-80.
- 25) 山添秀剛 (2015) 「水平表現としての上下のメタファーについて」『札幌学院大学人文学会紀要』97, 75-92.
- 26) Frank Boers. 2013. Cognitive Linguistic approaches to teaching vocabulary: Assessment and integration. *Language Teaching*, 46, 208-224.
- 27) Lakoff, George. 1987. *WOMEN, FIRE, AND DANGEROUS THINGS What Categories Reveal about the Mind*. The University of Chicago. (池上ほか訳 (1993) 『認知意味論』紀伊國屋書店)
- 28) Lakoff, G. and Johnson, M. 1980. *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press. (渡部ほか訳 (1986) 『レトリックと人生』大修館書店)
- 29) Williams, Noriko. 2010. *The Key to Kanji: A Visual History of 1100 Characters*. Cheng & Tsui Co.

## An Analysis of the Semantic Expansion of Kanji in Vocabulary Based on Prototype Theory: Focusing on Kanji „用” (*yoo*) and „進” (*shin*)

**Abstract:** This study investigates how the meaning of Kanji „用” (*yoo*) and „進” (*shin*) have expanded by analyzing their etymology and the vocabulary they represent. The analysis, based on the prototype theory, focuses on the polysemous nature and high word-building capacity of Kanji. It aims to create a groundwork for developing Kanji vocabulary materials for intermediate and advanced levels of non-Kanji area Japanese learners by creating expansion diagrams showing the semantic development process from concrete to abstract concepts, using metaphors as cognitive clues. Incorporating the expertise of cognitive psychology and cognitive linguistics into conventional Kanji vocabulary learning may contribute to more efficient learning of a large amount of Kanji vocabulary as well as improve abstract thinking ability and the acquisition of expressions for abstract concepts.

**Keywords:** Kanji vocabulary learning, origin of characters, lexical expansion, prototype and categorization, conceptual metaphors